

御 恩

鶴 岡 賀 雄

(昭和 54 年修士修了)

宗教学科に在籍して(「非在籍OD」という形容矛盾のような時期もあったが)、もう10年以上になる。今年からは研究室の助手という、大切な役まで仰せつかっている。その間、言う迄もないが、柳川先生には一貫して大きな御恩を被ってきた。

私にとって東大の宗教学科とは、「宗教学宗史学」の具体的内容は勿論ながら、何よりもその〈雰囲気〉であった。この〈雰囲気〉は価値がある、と思っている。そして少くともこの10年余、柳川先生は常にこの〈雰囲気〉の中心におられ、その〈雰囲気〉を生み出す大きな原動力であられた、と思う。私は、「専門」分野的には先生と違うため、柳川先生を指導教授としたことはなかったが、確かに私なりに先生の「宗教学」を学ばせて戴き——先生の「宗教学」は、私にとって、この研究室の〈雰囲気〉と密接に結びついている——、先生から学んだものは、知識としてまた発想法の如きものとして、貧しい乍ら今の私の大切な財産となっている。

少し具体的な記憶を開陳する。私は例の、戦後最大の進学者数を記録した49年進学の1人である。駒場の持出し授業に、先生の「柳田・折口」をテーマとしたゼミがあり、これが先生を知った最初であったと思う。この時柳田の『遠野物語』をよみ、「猿のふたち」という、今でも意味の分らない言葉を記憶した。同じ頃、やはり持出しの入

門講義があり、ヴァン・ジェネプの『L』の図を覚えた。

本郷に進学した年の柳川先生のゼミは、たしか「1930年代の欧米宗教学」がテーマだった。沢山の出席者があり、思い起せば記憶の糸は果てしなく辿られる。私は「宗教学」というにはやや異質の、ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』(1932)を発表テーマに選んだ。ゼミでの発表内容はすっかり忘れて(或いは抑圧して)しまったが、結局私は、そのベルクソンを卒論のテーマにもしたのであり、そこで持ち上げられている「(キリスト教)神秘主義」を、未だに「専門」として今日に到っているのである。

4年の時の柳川ゼミ(学部)は、あの「新・新宗教運動調査」(正式な題目は忘れた)であった。カトリシズムに興味を深めていた私は、当時流行っていた——今ではどうなっているのだろう——“Catholic Charismatic Renewal”という、カトリック内のペンテコステ派運動のようなものを「調査」した。調査といっても、半分「求道者」を装って、その活動に潜入・参加するのである。確か日活に就職した1年下のM君と、柳川先生、スィングドー神父につれられて渋谷区の或る教会を教えられ、あとは我々が勝手に集会に「参加」するというやり方であった。まだ20代初めの、ナイーブな私にとって、この「調査」はかなりの精

神の負担を強いるものであった。M君と毎週日曜夜の集会に通い、神父様やシスター方から、いろいろな「導き」を受けた。「調査である」という意識と、「彼らは何を見ているのか？」との端的な問いとを併せ抱いて、複雑な緊張状態で彼らに接していた。そうした頃、或る夜、私は不思議な体験をした。疲労れて寝床に入り、ふと緊張を解いたとき、額のあたりがかっと熱くなってきた。びっくりして蒲団の上に坐り直した。それは15分くらい続いた。私はジェイムズや岸本英夫や鈴木大拙の神秘主義の本は読んでいたが、ともかく私にはびっくりする体験であった。そのときから、私は彼らが何に祈っているのかが分るようになった気がした。「我は在りて在る者なり」とか、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、哲学者の神にあらず」とかいった文句にも、抵抗がなくなった。当時別のゼミで読んでいたアウグスチヌスの『告白』で、著者が何故、哲学的議論をすぐ中断して祈りの文句を書き連ねるのにかにも納得がいった。「神秘体験」というべきであろうか。

大学院に入って1年目の柳川ゼミは、たしか「象徴論」がテーマであった。ゼミの始めに先生は、何でもいいから各々が「象徴論」に関して興味をもっている書物を書いて提出してくれ、と言われた。私は厚顔無恥にも、当時読んで感心していた、J. デリダや、ハイデッガーや、リクールなどの本を挙げた筈だ。他にウィトゲンシュタインや大森荘蔵の本などを挙げる学生もいて、先生はお困りになられたようであった。先生が徐々に体調を崩されはじめたのは、その頃からではないかと思う。

何だか先生にかこつけて自分のことばかり書いてしまったが、上記のような意味でも私は先生から直接・間接の大きな御恩を受けているのである。勿論、その御恩は今日にまで及び、記すべきことはまだまだ多いのであるが、はや、紙数がない。

先生には、これからもその軽快自在な発想で、我々を密かに導き続けていただきたいと念ずるのみである。